

口頭発表

日本における動物介在療法に関する文献レビュー

佐野葉子*

東京福祉大学 社会福祉学部保育児童学科

Review of literature on animal-assisted therapy in japan

SANO Yoko*

はじめに

動物介在療法 (Animal-assisted Therapy: 以下 AAT とする) は、現在日本において様々な方法で実施されている。また実施している人材に関しても、医師、看護師、理学療法士、ドッグトレーナー、一般のボランティアなど多岐にわたっており AAT の研究に関しても多角的に研究されている。今回は AAT に関する文献レビューを行い今後の課題を見出すことを目的とした。

方法

文献検索サイトの医学中央雑誌および CiNii において、「動物介在」「動物介在療法」「アニマルセラピー」をキーワードとし過去 10 年間の文献検索を行った。そのうち介在動物として、昆虫、魚、ロボットを対象としているものは除外し分析を行った。

結果

AAT に関する研究のうち、AAT を受けた人に関する効果を検証したものが最も多かった。効果の検証の方法は、尺度票や調査票によるもの、面接やインタビューによるものがあり、AAT に関しての効果が認められたと報告された研究が多かった。その他には、AAT を実施した人の意識に関するもの、AAT の方法やプログラムに関するものなど研究の内容は多岐にわたっていた。しかし介在動物の福祉に関する研究は少なく、犬のストレスに関する研究が 1 件あったがこれは介在活動に関する報告あり、AAT の動物に関する研究は皆無であった。

AAE を受けた対象者は、自閉症、発達障害、知的障害、脳性まひ、発達障害、がん、認知症、アルツハイマー病などであった。AAT に介在されている動物は、犬、猫、馬、イルカなどであった。

考察

AAT を行った結果、効果が認められたと報告されていた研究が多かった。AAE の場合、研究の対象が人であり脳内の状態の分析を行うこと、他の治療を全く行わないで AAT だけでの評価を行うなどの方法は不可能である。AAT に関しての研究は、研究の特性上効果に関してバイアスが全くかからない状態で行うことが難しい。そこで今後 AAT の研究を行う際には、サンプルの選択方法の検討やサンプル数を増やしてできるだけ客観的な結果を得ること、また再現性のある研究が必要であると考えられた。

AAT に関しては「療法」とよばれているものの、日本において医療として認められていないため病院等で様々なプログラムを行ったとしても診療報酬はなく収入にはつながっていない。また AAT を実施している人も各団体に所属している個人でのボランティアでの参加が多く、所属している団体での活動がメインとなっている。各団体で AAT に関する研修会や講習を実施しているが、AAT の質の保証に関しては一定とは言えない部分もある。

今回の結果より AAT の効果については明らかになってきた研究が多かったが、できるだけ大規模な客観性のある研究を行い結果を出し、効果的なプログラムの開発を行うことが必要であると考えられた。また、AAT を行う側の質の保証も考慮していく必要が示唆された。そして人だけではなく動物の福祉に関する研究も行っていく必要があるのではないかとはいえよう。

謝辞

本研究をおこなうにあたり参考にさせていただいた研究者の皆様に深く感謝いたします。

* 連絡先: yosano@ed.tokyo-fukushi.ac.jp 〒 372-0831 群馬県伊勢崎市山王町 2020-1